

「農業を子どもたちの夢に」 イチゴで就農、土耕・高設栽培を両立

岐阜市 小野一樹さん



【岐阜】「これから就農する人のモデルケースになりたい」と話す岐阜市でイチゴを生産する小野一樹さん(39) 写真 Ⅱは、2020年6月に高設栽培12坪と土耕栽培10坪のハウスを新設し、就農した。

小野さんは静岡県の中学校の教員を辞め、地元岐阜で何か一から始めたいと考えていたところ、JA全農岐阜いちごで就農した。

小野さんは静岡県の中学校の教員を辞め、地元岐阜で何か一から始めたいと考えていたところ、JA全農岐阜いちごで就農した。

新規就農者研修所のボスターを見て農業に興味を持った。

インターネットや知人から情報を収集し、研修内容や補助事業などの手厚い支援が決め手となり、19年に研修所に入所。研修では一から栽培方法を学び、JAからの農地紹介や県の補助事業によるハウス建設の支援を受けて就農した。

就農後も研修生同期と連絡を取り合い、人手のいる定植などは協力し合うなど研修所でのつながりを大切にしている。また、小野さんの上下関係なく気さくに接する人柄が大学生のアルバイトの雇用につながり、若く活気のある農園となっている。

栽培面では、ラ

有田みかんの魅力を発信

和歌山 早和果樹園



テラス&マルシェをオープン

【和歌山】(株)早和果樹園(秋竹俊伸代表取締役社長)が3月24日、カフェテラスとみかん直売所の機能を要したテラス&マルシェ「果汁と果実」 Ⅱ写真Ⅱをオープンした。

店舗は同時竣工した「早和みかん選果場」に併設。年間を通じて、有田みかんの認知を高める施設になるよう、ミカンジュースやスイーツなどを提供するオープンカフェテラスと、ミカンのシーズン中には選果場から選別されたミカンを直接購入できるマルシェからなる。

今回オープンした店舗は、本社店、南紀白浜店につぐ3店舗目の直営店舗。ミカンを使った新たなお土産パンなどを製造・販売する。また併設する選果場では、シーズン中には選果の様子を見学できるエリアを入り口付近に設置する。

同社担当者の岡本●●さんは「気軽に立ち寄りいただき、有田みかんや地域の魅力を多くの人に伝えていきたい」と話している。

造業者や中山間地域産品を取り扱う小売業者もブランドを使用できる。ブランドロゴマークを付した商品の本格販売開始は、今年10月ごろを予定。

これまで長岡市がブランド展開してきた、おいしき重視のながおかコシヒカリ「金匠」、環境に配慮して栽培した「小さな生き物たちと育むお米」の2種類に、「NAGAOKAMOUNTAIN GIFTS(ナガオカマウンテンギフト)」がこのほど加わった。長岡産米3大ブランドとして、納得感や共感を得られる価値を消費者に発信するため、関係者が連携しながら積極的なPRを進めていく。

(長岡市農業委員会)



(左上) NAGAOKA MOUNTAIN GIFTSのロゴ、(右上) 小さな生き物たちと育むお米のロゴ、(左下) 金匠のロゴ

おいしい野菜届けて12年

京都・伊根町 かわうそ農場 渡邊陽子さん

【京都】12年前に夫婦で伊根町に移住した渡邊陽子さんが営む「かわうそ農場」。夏は白玉とまと、冬は雪の下で育ったニンジンなど、約30品目の野菜を栽培し、



町内と近隣市町で移動販売している。

野菜を使ったレシピを配っていると、「おいしい」

(伊根町農業委員会)

毎週85力所で移動販売する渡邊さん、①家で夫が作るニンジンフライはエビフライそっくり

「新規就農のモデルケースに」

果菜類栽培、土づくりなど工夫

長野・南牧村 鶴賀達也さん

【長野】南牧村でミニトマトやズッキーニ、スイートコーンなどの果菜類を栽培している鶴賀達也さん(47) Ⅱ写真Ⅱは、新規就農し、今年で9年目になる。

以前は都内で働いていたが、東日本大震災をきっかけに出身地の長野県で暮らしたいと思うようになり、奥さんの実家がある南牧村に移住した。それまで農業の経験はなかったが、村内の農業法人で約5年間農業に携わ

中心に栽培している鶴賀達也さん(47) Ⅱ写真Ⅱは、新規就農し、今年で9年目になる。

地域計画始動 に向け研修会

兵庫・加古川市農委会

【兵庫】加古川市農業委員会は3月24日、総会後に「農地利用最適化推進全体会」を開催。「農用地利用集積計画の廃止と農用地利用集積等促進計画の本格運用」と題して、農業委員会の桑山隆事務局長を講師に研修会を開催したⅡ写真。

同市では、2024年度に36集落で地域計画を策定している。4月以降は相対の利用権設定が廃

農福連携、耕作放棄地解消へ

石川県農委会女性協議会が研修会

【石川】県農業委員会女性協議会は3月18日、石川県農場産業振興センターで2024年度3回目の研修会を行った。

研修では、「農福連携と耕作放棄地解消」をテーマに、(株)ボタジェ(津幡町)代表の澤邊友彦さんが自身のこれまでの取り組みについて講演Ⅱ写真。県内の女性農業委員・農地利用最適化推進委員ら25人が参加した。その後、同法人が運営するハープ農園に移動し、現地視察を行った。

澤邊さんは17年に同法



止されるため、従来の利用権設定と促進計画の違いや地域計画の目的を再確認。2006年から始まった品目横断的経営安定対策までさかのぼり、担い手への農地集積・集約化の施策の歴史と交付

金制度の推移などを説明した。

また、地域計画と農振計画、農地転用との関係も解説。馬田禎樹会長は「委員の理解を深め地域へのフィードバックを期待したい」と語った。

もっと新規就農者が増えてほしい。葉野菜の一大産地だが、果菜類も魅力的な品目。自分がモデルケースとなり良い流れを作りたい」という思いがあったからだという。

資材や人件費の高騰、気象条件の変化など、従来の農業が年々難しくなっているが、減農薬栽培や、好気性微生物を取り入れた土づくりなど栽培を工夫し、持続可能な農業に取り組んでいる。

「常に10年後の地域農業を想像しながら農業をしていかないとけない。地域の一大産業の農業が明るい方向に進み続けるよう考えていきたい」と将来への思いを語る。

「フラッグシップ輸出産地」 切り花で全国初の認定

JA愛知みなみ

【愛知】農水省は、一層の輸出拡大を図るため、継続的に輸出に取り組む産地を「フラッグシップ輸出産地」として2024年度から認定している。東海エリアで初めての認定が、JA愛知みなみ(愛知県田原市)、



前列左からまるゑいの関谷仁さん、東海農政局の福井逸人次長、JA愛知みなみの鈴木代表理事組合長。後列左から東海農政局の西澤克二輸出対策推進官、まるゑいの梅原原さん、JA愛知みなみの藤城好昭部長、東海農政局の石橋大彦経営・事業支援部長

木照彦代表理事組合長は「花は国境を越えて和みや安らぎを与える。国際的な交流を深めていきたい」と話した。

まるゑいは、お茶で認定された。三重県のお茶は古くから生産されており、国内ではシエア第3位。明治期には輸出も行われていた。生産農家と連携して、輸入国の基準にあう農薬の使用や高い衛生管理のもとで粉末加工などを行い、長期的な輸出を進めていく。

中日本版

各地の話題

